卒業制作　雰囲気映画　『青春の終わり』

知念　夕貴

（近藤晴夫ゼミ）

タイトルの意味

青春の意味とは「年の若い時代。青年時代。」（語源由来事典）とあるが，私の中の青春の意味を以下に示す。

親というものは子供としての私たちを守るという，世の中でいう責任がある。それゆえに親の束縛があり，将来自分を養ってくれるであろうというという期待もある。しかしながら，子供としては自分だけの人生を日々過ごし，生き方を自由に考え，方向性を決められる期間。モラトリアム期間のことを青春と呼ぶのではないだろうか。

その期間が終わってしまえば，もう親のせいや誰のせいにも出来ず，自分の人生に責任をとらなくてはいけない。

今年の三月に大学を卒業し，モラトリアム期間を終える私がこの想いを忘れないように，卒業制作として長編映像『青春の終わり』に取り組んだ。

卒業制作において影響を受けた映画

『サイコ』について

『サイコ』（*Psycho*）は，1960年，アルフレッド・ヒッチコック監督によって制作されたモノクロ映画。原作はロバート・ブロックによる同名のスリラー小説で，エド・ゲインによる実際の犯罪に触発された作品。現在は一ジャンルを築いているサイコ・サスペンスの元祖であり，代表作でもある。（wikipedia）

恐怖映画『サイコ』は1960年に全米公開された。この映画を見た人々は『サイコ』の「おもしろさ」あるいは「怖さ」をどのように受けとめたのであろうか。加藤幹朗（2001年）は「劇場の暗闇の中で『サイコ』を見始めて五十分ほどが経過したとき，理想的な観客は腰を抜かすようなショックに見舞われる。ヒロイン（ジャネット・リー）がほとんどなんの前触れもなく，なんら明確な理由もなく，誰とも知らぬ人物に突如襲われ切り刻まれ絶命するからである。ヒロインのこの不意の死は，理想的な観客を死ぬほど驚かす。それはヒロインの死は理想的な観客本人の死だからである。ヒロインが浴室で惨殺されるとき，それを傍から見ていた理想的な観客もまたいわばそこで惨殺される。理想的な観客とは，必要とあらば，物語の主人公にほぼ無条件で感情移入する者のことである。そもそも彼あるいは彼女はなぜ身銭を切ってまでして映画館に出向き，他人の生活と意見に関心をはらう必要があるのか。それは感情移入の渦に溺れんがためである。他人の人生をつかのまとはいえ我がものにせんがためである。

さらに言えば，感情移入をとおして自分ではない他の何者かになることによって，かりそめにも自己の限界をこえんがためである。

映画の観客は言ってみれば感情移入の化け物であり，隙あらば他人の心に入り込み，他者になりきって我を忘れたいと願っている人間だということである。」と述べている。

サイコのラストから

映画『サイコ』は，すでに亡くなっている母親に扮した主人公が，母親の死を認めたくないため，母親の人格が生まれて，多重人格となり，次々と殺人事件を引き起こすというものである。主人公が母親の人格にとってかわったという点について加藤幹朗（2001年）は「このおぞましくも不可能な自己同一化は，オフからヴァイスオーヴァへのシフトというマニアルな手法によってなかば実現化され，理想的な観客が心ならずもなかば感情移入してしまったこの殺人鬼は，母親に感情移入するあまり，彼女を殺害したあげく彼女にとってかわった人物である。椅子の上から観客席のわたしたちを見下ろしているこの男（女）こそ，登場人物に感情移入してやまない観客（隙あらば他人の

心にはいりみ，ヒロインであろうがヒーローであろうがとにかく他者になりきって我を忘れたいと願っている人間）のなれの果ての姿であるということを一体誰が否定出来ようか。」と述べている。

登場人物構成

『サイコ』にもあるとおり，主人公というものは，人に感情移入をさせなくてはならない。誰に感情移入させるのか。

卒論はいわば大学生活のまとめである。私は大学で初めて映像に関わり，制作の際，自分の全てが出てしまうものだと実感した。自分とは何か。どういった自分を人に見せたいのか。私の大学生活とは過去の自分を掘下げ，かき集め自分探しに徹した期間であった。その期間に一旦区切りをつけたいため，登場人物は全て自分である。

制作当時，私は帰りがとても遅くなった際に，レイプされかけてしまい，対人恐怖症になった。そのことをきっかけに，人間の恐怖心から引き起こされる殺人というものを描きたいと思い，自分の精神的なものを，主人公役の今井乃菜さんに演じてもらい，私が求めている他者を，道下智至君に演じてもらい，自分がかつて早くこうなりたかった自分を，自分自身で演じた。

こだわり

① 冒頭シーン
この卒業制作の元とした『サイコ』は殺人事件が起こることをあらかじめ予告編で示している。それをなぞって物語の冒頭で，人物の血まみれになっているシーンを出した。どうしてこんなことになったんだろうと観る人に考えてもらえれば，セリフがないミュージックプロモーションビデオ（PV）のような映像によって，私の伝えたい意味が伝わると思ったからである。

② 挿入曲
この映像に使われている挿入曲は，
「葬送行進曲」作品35　　ショパン
「雪は踊っている」　　ドビュッシー
「フルートソナタ第二番変ホ長調シチリアーノ」　　バッハ
の著作権に違反しない，フリー素材である。映像のために曲を短縮するのではなく，曲をまるごと使い映像に合わせた。それは自主制作ならではの時間に縛られていない利点を生かし，のびのびとした映像にしたかったからである。

③ 全て亀岡での撮影。
フィクションの物語を作るのに，困ることの一つは撮影場所の確保である。しかし幸いにも，私たち（撮影に協力してくれた人達）は京都学園の学生であり，大学構内は自由に使える。渋しぶ，大学内で撮ることと，大学で撮るのだという意気込みを持って撮るのとでは全く違う。無いものを嘆くのではなく，自分たちの中で視点を変えて工夫するという考え方は近藤晴夫ゼミで教わったことである。限られた中から工夫が生まれ，普段慣れ親しんだ大学を新たな視点で撮影できたので，京都学園大学を良く知っている人達に見て頂ければ，また違った楽しみ方ができるのではないのかと思う。

今回，私にしか作れない世界空間を出したかった。幼い頃からここ亀岡で育ってきた私にとって，山に囲まれ，人がいない風景は体に染み付いているものである。尚且つ，閉鎖的な物語を演出するのに，亀岡の風景はピッタリ合うものであった。

あらすじ

子供にとって，娘にとって，父親とはとても重要な存在である。家庭環境は子供の生き方に大きく影響するものである。しかし，主人公は家庭環境が余り良くはなかった。父親の愛情を受けられなかった女の子（主演　今井乃菜さん）である。彼女はそんな父親と二人で思春期までを過ごした。精神的に親との関係が上手くいかなかった子供はその後の人間関係を築くことが困難になりやすく，彼女はその例である。

精神的に一人だった彼女は現実を受け入れることが出来ずに，自分のなりたい理想像であり，尚且つ自分の精神面を支えてくれる人物（主演　道下智至君）を妄想で作りだした。その結果，父親

のいる部屋から抜け出し父親の記憶を消し，一人で（道下智至になりきり）ギターを弾いたりして心の平穏を得ていた。

しかし，父親とは娘にとって最初に出会う男性である。主人公は父親に恐怖を感じていたために，対人恐怖症であり，男性恐怖症である。主人公の理想像は男性(道下君)であり，女性としての自分の性を受け入れられない。そして，好意を持っている女の子(主演　知念夕貴)に対して，理想像になりきって接する。女の子はそんな主人公に特に何も言わず，心配もせず二人だけの日々を楽しく過ごす。そんな日々の中で彼女は友人の影響をうけ，友人の心の闇や，攻撃性だけを受けとってしまいカッターナイフを持ち歩くようになる。けれども，友人と過ごした閉鎖的な日々は主人公にとって居心地が良く忘れられずにいた。

大学に入り環境が変わっても，夜，家を逃げ出したり，カッターナイフを持ち歩く習慣も対人恐怖症も変わらない。しかし，そんな主人公を心配してくれる異性の友人（主演　安岡剛伸君）が現れた。彼は主人公に女性として接するので，主人公は彼が心配してかけてくれる言葉を，素直に受けとることが出来ずにいた。彼の言葉は届かないのか。決してそうではなく，それがきっかけで主人公は父親とまた向き合おうとするが上手くはいかない。父親に対しての攻撃性を持った嫌悪感が実は愛されたかったという願望であったことに気付いたが，不安定な精神状態の中で，運悪く人（出演　渡部敬太君）に襲われてしまい，その際に持っていたカッターナイフで相手を殺害してしまう。父親からも，その他の人間関係からも逃げてきた主人公は，この事件のショックで，人を殺したのは自分じゃないと思いこみ，理想像である男性（道下智至）のせいにして，一度はまた逃げ出そうと思っていた。しかし友人の言葉で引き戻され，いつも一緒にいた，理想像の人物と向き合う。

だがもう，理想像の人物は主人公を抱きしめることが出来なかった。繋いでいた手も離れ，主人公は現実を受け入れ，孤独の中，生きていこうと決心し，笑う。

青春の終わりだが，主人公の人生はこの時間が始まりなのである。

しかし物語としては孤独感，人との関わりを，克服出来なかったらの悲劇である。

『青春の終わり』のラストシーンについて

人を殺してしまった主人公は，そのことを記憶から消し，やったのは自分じゃない，いつも傍にいてくれる理想像の人物だと思いこむ。それは映画『サイコ』のラストシーンでも見られる通り，他者になりきって我を忘れたいと願っている人間のなれの果ての姿である。それは何も特別なことではなく，映画館の観客のように私達の身近にあり，ちょっとした人間関係のずれで誰もがそうなるかもしれない。身近に感じてもらいたく，主人公の女の子は特別な何かを（まだ）もってはいない。その後，主人公は人のせいにせず，今までのことを自覚し，現実社会に帰ってきた。自分の人生を歩き始めたのだ。人殺しをしてしまった彼女は一般社会からは，受け入れられないかもしれない。悪者かもしれない。悪者は反省して涙を見せるよりも悪を貫き通した方がかっこいい！と私は思っているが，彼女は私に笑ってくれた。笑えるのなら，人からどう思われようが，彼女なりの幸せや，希望がこの先にはあるのである。

反省点

この「青春の終わり」を完成させた際，協力してくれた人達に感謝の意を込め，客観的な意見を聞くために，ＤＶＤに何十枚か焼き，配らせてもらったが，場面ごとのストーリー性が弱い部分があり，使いまわしの映像はいただけないという厳しい意見が出た。作った当時の想いとして同じカットを使っている父親のシーンは，主人公から見た父親像であり，その場面が焼きついて離れないと伝えようとする表現方法だったが，使いまわしによる手抜き・無駄というマイナスイメージが拭えなかった。また同じカットを使っていなかったとしても，似たような映像だったら，観る人にしてみれば，同じような映像に見えてしまっていたので，表現方法として成功だとは言えなかったであろう。

さらに，似たような映像として，服装が同じだという点がある。主人公役の人には場面ごとに衣裳を変えてもらっていたが，さらに日時の細かい衣裳変更が出来ておらず，時間軸のわかりにくさ

が極まってしまった。

最後に，主人公の心理状態をもっと言葉ではなく，映像で表現する工夫や，もっと自分の作りたい画面をコントロールすることが必要だという意見も頂いた。

そういった『青春の終わり』で得た反省点は次回の制作に持ち越して，レベルアップを目指す。しかし『青春の終わり』は当時の自分の人生感の固まりのようなものであり，忘れずにいたいと思う。

スタッフ

監督 脚本 編集
知念夕貴（メディア社会学科４回生）
出演
今井乃菜（心理学科３回生）
道下智至（メディア社会学科４回生）
渡邉諒祐（メディア社会学科４回生）
安岡剛伸（メディア社会学科３回生）
知念夕貴
渡部敬太（メディア社会学科４回生）
岸田麻珠子（環境デザイン学科４回生）
撮影
知念夕貴
開田典子（メディア社会学科４回生）
撮影協力
井上将史（メディア社会学科４回生）
玉井沙織（メディア社会学科４回生）
写真提供
開田譲二
開田典子（メディア社会学科４回生）
協力
稲内大輔（メディア社会学科４回生）
上奥喬介（メディア社会学科４回生）
衣装提供
田邊雄経（メディア社会学科４回生）
上山貢平（心理学科２回生）

協力してくれた人たちへの感謝

2011年６月に脚本第一稿が完成した時，当初協力してくれたゼミ仲間（井上君・玉井さん・稲内君・渡邉君）に出演を依頼していた。皆，快く引き受けてくれ，出演だけではなく，演劇部の今井さん・安岡君・岸田さんに出演依頼をしてくれたり，出演者の衣装，特に主人公の白い服等も一緒にこだわってくれた。脚本が改正され，出演シーンがなくなった後も，何かと協力してくたり，私の制作にあたっての不器用さを支えてくれた。撮影にあたってなるべく出演者の人たちにとって負担にならないようにするため，出演者のスケジュールにそって撮影をさせてもらった。コンセプトは変わらないが脚本の変更が多く，とくに主演の二人（今井さんと道下君）に迷惑をかけてしまった。授業などで忙しい中，最後まで私に付き合ってくれたので，感謝し尽くせない。

制作にあたっての苦労

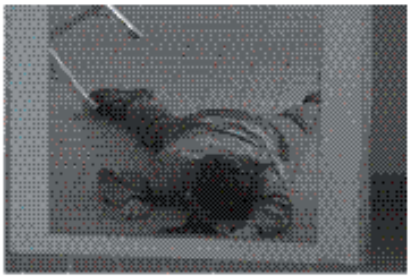
脚本の変更が多かったため，出演者には役柄の心情をつかんでもらい，カメラでの動きは当日，出演者の人に私がカメラを回しながら伝えた。人に自分の思っていることを伝えるのがとても最初は難しかったが，事前に撮ったカメリハの映像や画像を出演者に見てもらったり，携帯にカメラの動きを細かくメモをする工夫で，撮影の後半はスムーズに楽しく撮影できた。

今回，数多くの人達に協力してもらったが，協力してくれた人達にとってのメリットは余りないのである。皆の善意に非常に感謝している。この恩を忘れず，私も今回関わってくれた人への力になりたいと思っている。

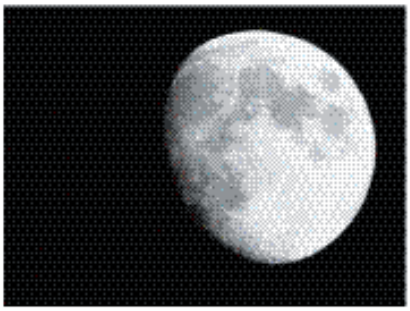
参考文献

語源由来事典　http://gogen-allguide.com/se/seisyun.html
wikipedia　http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%82%B3_%281960%E5%B9%B4%E3%81%AE%E6%98%A0%E7%94%BB%29
加藤幹朗　2001『映画とはなにか』みすず書房　p. 21，13行目～p. 22，16行目　p. 45，11行目～p. 46，15行目

撮影期間と工夫点・エピソード

	第二クラブハウスでのシーン 脚立から落ちた父親の設定だったので、父親役の渡邊君には思べたに寝転んでもらうという苦労をかけた。 どこか不思議な工夫のある空間にしたかったため、脚立の片脚をアシスタントの人に上げておいてもらい、斜に決った父親の姿を撮影した。 このシーンの時の血のりは、ケーキシロップと食紅（赤と緑）であり、甘い匂いがする中、通りかかった警備員さんに血のりが本物の血だと勘違いされ心配をかけた。	7月の前半から、後半 火曜日放課後 出演者の都合が良い火曜と金曜の放課後に打ち合わせ、撮影
	屋文館スタジオの（電気を消しての ）シーン 多い時には出演者の他、アシスタントを含めた五人で撮影。（井上君、玉井さん、都内君、安岡君） 暗い部屋の中での撮影なので、カメラ以外の人には携帯電話の光で出演者を照らしてもらった。 青白い光を出すため、青いビニールを光に被せて貰ったりした。	7月の前半から、後半 火曜日放課後 出演者の都合が良い火曜と金曜の放課後に打ち合わせ、撮影

	主人公と友人の自転車のシーン 出演者の二人には、親しさとぎこちなさを演出してもらいたく、そして誰が見ても学生時代の青春だと思うような映像を作りたかったので、出演者とアシスタント（上奥君）との全員に映像のチェックをお願いし、意見を出して貰った。 出演者の人には何度も、自転車に乗ってもらった。	8月の前半 平日火曜日放課後 出演者の都合が良い火曜と金曜の放課後に打ち合わせ、撮影
	展文館制服姿のシーン。 撮影の日、ＧＢＳ（放送局）にガンマイクを持ってもらい、長い台詞を出演者の二人には言ってもらったのに、編集段階でほとんど台詞を切る結果に。二人には悪いことをしたと思う。	8月の前半 出演者の都合が良い平日に撮影
	夜、大学のコンビニ横の休憩場のシーン。 展文館での二人のシーンの後撮影であり、現場に到着した時点で夜遅く、21時半に照明が切られてしまうので、出演者には急いで着替えてもらった。	8月の前半 出演者の都合が良い平日の放課後に撮影
	南部公園のシーン 出演者二人とアシスタント（演部君）との四人で撮影。 アシスタントと共にケチャップと食紅（赤と緑）で血のりを作成。 まだ夏だったので、ケチャップに虫が寄ってきて大変だった。	8月の前半 出演者の都合が良い平日の放課後に撮影 この撮影後、編集に入る。

	夜、自動販売機のシーン 10月なので、夏使用の衣装で撮影出来るギリギリの涼しさだった。 血のりは、ケチャップと食紅の組み合わせであり、クライマックスなので、ケチャップがある限り大量に作った。 死体のシーンは手をアップにし、出演者には横にブルーシートをひいて寝転がってもらった。 死体を引きずる音は、女性が男性を引きずるのは大変なので、私を出演者の人には引きずってもらった。	１０月の前半 出演者の都合が良い日曜日に撮影
	月の写真 写真も映像に撮れるとのことで、日頃写真を撮っている友人(岡田典子さん)に依頼。すると一眼レフカメラ（PENTAX K20D）を持っている友人のお父さん（誠二さん）が撮影してくれ、友人が加工して提供してくれた。私がそれに色づけし使わせてもらった。	１０月後半 編集反映とナレーション撮り、 撮影継ぎ足し。 １１月前半 『青春の終わり』 完成。